

「吉田清治」長男、衝撃の告白

「慰安婦像を

クレーン車で撤去したい」

慰安婦問題を作った男の肖像

生年も出身地も定かでなく、学歴も経歴も不明。そして名前はいくつもあった——。謎に包まれてきた「吉田清治」の正体を長男が語った。

おたかみき

大高未貴

ジャーナリスト

1969年生まれ。フェリス学院大学卒。一〇〇か国以上を放浪、ダライ・ラマ一四世、アラファト議長などにインタビューした。著書に「ISIS イスラム国残虐支配の真実」。



写真 読売新聞／アフロ(左)、時事通信社

止まらない日本バッシング

平成二六年八月五日、朝日新聞は朝刊一面で「慰安婦問題の本質 直視を」と自社の立場を説明する記事を掲載したうえで、一六、一七面の見開き全面を使っ

や杉浦信之取締役らが会見を開き、謝罪するに至ったのだった。

あれから二年。

国内では、教科書から慰安婦問題の記述が消え、ある程度決着がついたように見える。だが、海外では解決どころか更なる悪化を見せている。慰安婦問題を「最終的かつ不可逆的に解決する」とうたった昨年末の日韓合意締結後にも、アメリカやオーストラリアで、在米・在豪韓国人、中国系活動家らによる反日ロビ活動に拍車がかかり、新しい慰安婦像設置の動きも加速している。また史実にそぐわない慰安婦問題の記述が米国カリフォルニア州の高校教科書に掲載されること、今年七月、教育委員会の満場一致で決定された。これが他州に及ぶ可能性もある。

何より問題なのは、「吉田証言」を根拠とするクマラスワミ報告が撤回されなかったことだ。

クマラスワミ報告は平成八年、国連人権委員会の決議に基づいて提出された日本への非難勧告書だ。そこでは、第二次

世界大戦終了時に行われた米軍の「慰安婦」等への聞き取り調査とともに、吉田証言が重要な証拠として出てくる。中にはこうある。

「強制連行を行った一人である吉田清治は戦時中の体験を書いた中で、国家総動員法の一部である国民勤労報国会の下で、他の朝鮮人とともに1000人もの女性を『慰安婦』として連行した奴隷狩りに加わっていたことを告白している」

平成二六年、外務省の佐藤地人権人道担当大使は、作成したラディカ・クマラスワミ女史と面会し、朝日新聞の吉田証言による記事は虚偽であったとする訂正報道に従い、吉田証言の引用部分の撤回を申し入れた。だが彼女は「吉田証言は証拠の一つに過ぎない」とし、いまだそれに応じていない。

また、韓国政府も平成四年に「日帝下軍隊慰安婦実態調査中間報告書」を作成して吉田証言を採用しているが、それを取り消したという話は聞かない。

朝日新聞が吉田証言の記事を撤回しようとも、国際的には事態がまったく改善

されていないのだ。「(慰安婦は)残虐性と規模において前例のない二〇世紀最大規模の人身売買のひとつである」というアメリカ合衆国下院一二二号決議は、いまも生きている。

慰安婦問題最大の焦点は「日本軍が慰安婦を強制連行」したかどうかである。だが日韓両政府が血眼になって記録を調べても、それを証明する公文書資料は見つかっていない。だから山口県労務報国会下関支部の動員部長だった吉田清治氏の「軍の命令で朝鮮人女性を強制連行し慰安婦にした」という証言が重要だったわけだ。だがそれが虚偽であることは、朝日新聞の撤回を待たずともはっきりしていた。当の清治氏自身が、週刊新潮の取材にこう答えているのだ。

「まあ、本に真実を書いて何の利益もない。関係者に迷惑をかけてはまずいから、カムフラージュした部分もあるんですよ。事実を隠し、自分の主張を混ぜて書くなんていうのは、新聞だってやっていることじゃありませんか。チグハグな部分があってもしょうがない」(平成八年

五月二・九日号)

また自ら済州島の調査を行い、すでに平成四年に産経新聞で証言の信用性について疑義を投げかけた現代史家の秦郁彦氏もこんなエピソードを書いている。

電話で清治氏と話した秦氏が、「著書は小説だった」という声明を出したらどうか」と勧めたところ、「人権屋に利用された私が悪かった」「私にもプライドはあるし、八十五歳にもなつて今さら……このままにしておきましょう」と話したという。

吉田清治氏は意識的に歴史を捏造した。それは明らかである。ではなぜ、何のためにそうしたのか。虚偽の証言を続けてきた動機は何なのか。それらはいぜん謎のままである。いやそれどころか、実は清治氏がどんな人間であるか、どんな経歴であるか——どこで生まれ育ち、何をしてきたのか、その学歴も職歴も実はよくわかっていないのだ。

いったい吉田清治とは何者なのか。

今回、私は吉田清治氏の長男のロングインタビューに成功した。そこからわか

ってきたのは、思ひもよらない新事実だった。

謎の生い立ち

長男は関東北部の県で質素な一人暮らしをしていた。現在六六歳。翻訳で生計を立てているという。小柄で温厚、とてもまじめそうな風貌だった。

「父が犯した慰安婦強制連行の捏造について、吉田家の長男として、日本の皆様にたいへん申し訳なく思っております。できることなら、世界中の慰安婦像をクレーン車で撤去したい。父の過ちを糾したい、少しでも罪滅ぼしをしたい、そういう気持ちから、私の知りうることをすべてお話しします。私自身、なぜ父がそんなことをしたのか知りたいのです」と、吉田清治氏の長男は語り始めた。清治氏は平成二年七月三〇日に死去するが、それまでずっと一緒に暮らしてきたのが、この長男だった。

清治氏は、その生年からしてはつきりしていなかった。出生地も諸説あった。さらに言えば、門司市立商業高校に通っ

たが、その卒業名簿(平成一〇年発行)では第一一回卒業者の物故者のほうに入っている。

今回、長男から見せてもらった資料から、清治氏は、大正二年一月一日生まれとわかった。出生地は、福岡県鞍手郡宮田町大字長井鶴。本籍は福岡県遠賀郡芦屋町大字芦屋である。

本人は本籍などを山口県としていたが、お隣の福岡県で生まれ育ったわけである。そして本名は、吉田雄鬼という。これはすでに判明していた事実だが、長男によれば、

「本来でしたら雄治という名前になるはずだったのですが、役場が書き間違えて治を鬼としてしまった。父は、本名が好きではないと言っていました。それでペンネームをつけて清治としていたのだでしょう」

とのことだ。

父は音吉、母はタメ。長男だが、姉が三人いたという。

清治氏は、大正八年、わずか五歳で吉田家の家督を相続している。祖父の藤太

郎が亡くなったあと、父を飛ばして雄鬼が戸主となっているのだ。

その経緯は不明だが、祖父・藤太郎は遠賀郡にあった三菱石炭鉱業の貯炭場の主任をしており、当時は羽振りが良かった。芦屋の役場の向かいに土地を買って家を建てたのは、この藤太郎だったという。急死した原因は、当時大流行したスペイン風邪。地元福岡県立門司商業高校(門司市立商業高校の後身)の記念誌にも、大正七年から八年にかけ北九州で大流行とある。

幼くして祖父から直接家督を相続した清治氏だが、この他にも吉田家には不可解な記録がいくつもある。清治氏の従兄弟として他家から二名が入籍しているほか、清治氏と四歳しか違わない朝鮮人が清治氏の養子となっているのだ。これは後に詳しく記す。

吉田氏は門司市立商業高校に学び、昭和六年に卒業。そして、「東京の大学で」と、自著『朝鮮人慰安婦と日本人』(新人物往来社)には記している。どうやらこれは法政大学らしいが、進ん

だ学部、卒業したか中退したかは定かでない。法政大の名簿にその名前は無い。

その後は何をしていたのか。

前掲書では、昭和一二年に満州国国務院地籍整理局、昭和一四年から一年余り陸軍航空輸送隊の嘱託、一五年に中華航空上海支店に勤務していたという。同年六月に金九(朝鮮独立運動家)を輸送したかどで逮捕され、懲役二年の判決を受けたことになっている。そして同年、問題の山口県労務報国会下関支部の動員部長に就任したというのだ。

これには以前から疑義が差し挟まれてきた。歴史学者・上杉千年氏の調査では、中華航空社員会で清治氏を記憶する人はなかったし、逮捕についても先の秦郁彦氏の追及に「アヘン密輸に絡む軍事物資横領罪」と答えたことがある。また逮捕された人物が出所後すぐ、半官半民の半ば公職に就くおかしさも指摘されている。長男が言う。

「父は胸のレントゲンを撮ると白い影が写ったんだそうです。結核と間違われる

けれども、結核ではない病気なんだそうです。それで軍の徴用を免除され、軍属みたいな形でいろいろな仕事をしました」

そして、

「上海の航空隊とか、満州で地籍整理をやっていたのは聞いています。満州では、一年間現地の学校で勉強して中国語がしゃべれるようになった。それで部下の朝鮮人二人、中国人を五人から一〇人くらい、馬車や馬、ラバに乗せて調査に行った。そこでは航空写真をもとに中国人が測量し、彼らを朝鮮人に管理させていたということです」

清治氏はこの満州で李禎郁という人物を養子にしている。昭和一二年四月のことだ。清治氏と四つ違いだから一九歳の若者である。禎郁氏はその五年後、満州で日本人と結婚する。

清治氏は前掲の自著で、東京生まれの金永達なる人物を昭和一二年に養子とし、同年小学校教師の日本人と結婚、直後に小倉連隊に入り、昭和一三年九月、中国の間島省で戦死したと書いている。

もともとあった事実を歪めて話を作っているわけだ。

「若い頃、正義感に燃えて養子にしてやったと父は言っていました、どこまでがほんとのことなのか。私は会ったことがありません。ただ養子にしたことで、親戚から戸籍を汚したと、非難されたようです。また職場からもよく言われず、それが刑務所に投獄される理由になったと言っていた。ただ詳しくはわからないのです」

この養子を巡って何があったのか。

戦前に禎郁氏には二人の子供が生れた。長男は昭和一八年に福岡で出生、次男は昭和二〇年八月に中国・遼寧市で生まれている（翌年瀋陽で死去）。だから日本と大陸を行き来していたことがうかがえる。戦後は日本に来て、吉田家の籍からは昭和三年に抜けているが、その後も清治氏の人生に影を落としていく。

吉田清治の戦後

「慰安婦狩り」をしたという山口県労務報国会下関支部について、長男はほとん

ど何も聞いていない。ただし、これだけは訴えたいところ述べる。

「労務報国会の下関支部は朝鮮人男子の労務というか、下関市内の大王、左官、土木工事の方々を雇って日当で払う仕事の現場監督みたいなものですから、従軍慰安婦とは何の関係もない。そのことは長男としてはっきり言っておきたい」

労務報国会は日雇いの労働者の組織化を図るため昭和一七年六月に設置された半官半民の組織である。吉田清治氏が在籍していた確かな証拠はないが、否定する材料も見つかっていない。ただ長男はこんなことを言う。

「終戦時、父は労務報国会で物資の管理をしていたそうです。だから戦後、その物資を自由に隠匿できた。戦後一番必要になるものは何かと考えると、食料です。それを作るために百姓さんには肥料が必要ですから、そこにあった配給の余りものの肥料を隠匿して『下関肥料』という会社を作った。一時はもうかったようです。ただ父は商売の経験がない。どんな勘定であつと言う間に倒産してしま

いました」

調べてみると、昭和二五年九月一八日付で「下関肥料株式会社」という会社が登記されていた。取締役二名に続き、「会社を代表する取締役」として吉田雄鬼の名前がある。昭和二六年に取締役一人が辞任し、清治氏の妻フサエさんに替わっているから、この頃までは活動していたのかもしれない。

同時期、清治氏は下関市議会議員選挙に共産党から立候補して落選している。昭和二年のことだ。これに関しては、「雇っていた朝鮮人がみんな共産党で、それで立候補したんじゃないかな。担がれて、その後は共産党とのかかわりなんて一回もないです」

と長男はそっけない。

時代を少し遡るが、清治氏が結婚したのは、昭和一九年五月のことである。下関市に婚姻届を出している。妻フサエさんの実家は、農業のかたわら、煙草と塩の専売店を営んでいたという。戦後の混乱期は実家かその付近に住んでいたようだ。

そして今回のインタビューをした長男が生まれるのは、昭和二四年。二年後には次男が、その翌年には三男が誕生するものの、三男は生後一週間ほどで他界してしまふ。

長男の記憶するところでは、清治氏は生涯、仕事らしい仕事に就いたことがないという。

「小学校のとき、経済的な理由で何回も引っ越しました。だからよく転校した。貧しかったと思います。ただ父は非常に気位が高くて、働かずに家にいても男子厨房に入るべからずという感じで、女子供のやるようなことは絶対しない。母の実家にいたときだけ食事には困らなかったという記憶があります」

記録では、昭和三〇年から三五年まで、一家は東京・三鷹に住んでいたことになっている。

「借金取りに追われて、逃げるようにして三鷹へ行ったんじゃないでしょうか。四人掛けの席の真ん中に板をかけて親子四人、ゆったり足を伸ばして座れるようにしたのを覚えています」

長男の生年を考えると、三鷹には入学した小学校があった可能性がある。長男は下関市の小学校二校にも通った記憶があるから、中学までには下関に戻っている。その東京での時間が何だったのか、長男にはわからない。

戻って間もなくの頃だったか、清治氏はNHKが募集していた「ラジオと私」

という懸賞に応募して、一等、一〇万円を獲得したという。当時の大金である。

「私が小学六年か中学一年頃かと思いますが、いい作文でした」

と長男は振り返る。

父（清治氏）が帰宅すると、ラジオから流れてくるのはやりのコマースャルソングに合わせ、息子二人が楽しそうに踊っていた。普段、父は子供に歌謡曲を聞かせないようにしていたから、母がラジオを消そうとすると、父はその楽しそうな様子に「そのまま、消さないでよい」と母に告げた――。

そんな話だったという。

「テレビが買えない貧しい家庭を象徴するものがラジオでした。父は教育に関し

ケトル

最高に無駄が詰まった
フンチーマスガジン

<http://www.ohatabooks.com/qjkettle/>

毎偶数月15日発売 900円＋税 太田出版

好評発売中

て厳格でしたので、家では歌謡曲など聞かせてもらえなかった。でもこの時は楽しそうな様子に思わず笑みがこぼれたという内容で、短い文章の中に幸せな家族の情景が浮かぶと高い評価を得たのです。父は福岡に行つて表彰され、賞金をもらつてきた。あの頃が吉田家が一番幸せだった時かもしれません」

この頃、清治氏は朝鮮人の経営するパン屋に勤めていた。

「その経営者は戦前からの付き合いだったので、父の首を切るにも切れない状態だったそうです。だからその社長はこれで辞めさせることができると喜んだ。一家はその賞金で引越すのですが、父はそのお金で三回も四回も引越せると言っていました」

清治氏によれば、懸賞に応募したのはこれだけではない。

「応募のほか、ラジオとかテレビのモニターもよくやっていました」

いまで言う投稿マニアだったのか。

やがて清治氏はもう一つ、大きな懸賞で佳作となる。

昭和三十八年、週刊朝日が「私の八月十五日」の手記を募集し、結果が同誌八月二三日号に掲載された。特選は一名、後に作家、エッセイストとして知られる近藤富枝である。記事には他に入選五名、佳作一〇名の氏名が出ている。その佳作のひとりに吉田東司の名前がある。それは清治氏のことだった。

入賞作までは全文掲載されているが、佳作は編集者が抜粋しながら紹介している。以下、引用する。

〈特選から佳作に至るまでの各編は、すべて、戦争の被害者としての立場から、八月十五日を想起したものばかりであった。しかしただひとりだけ、下関市の会社員吉田東司氏(註)は、加害者の立場からあの日を回顧する。〉

「私はそのころ山口県労務報国会動員部長をしていて、日雇労務者をかり集めては、防空壕掘りや戦災地の復旧作業に送っていた。労務者といっても、そのころはすでに朝鮮人しか残っていなかった。私は警察の特高係とともに、指定の部落を軒なみに尋ねては、働けそうな男を物

色していった」

「奴隷狩りのように」と吉田氏自身もいう。その最中にはいったのが終戦のニュースだった。朝鮮人の報復への恐れは、直ちに頭に浮んだ。帰宅した吉田氏の家の前には、案の定、二十人ばかりの朝鮮人が集っていた。動員された朝鮮人の行先を教えろという。問い詰められた吉田氏はついに捨てばちになった。

「私は靴ばきのまま座敷にかけ上がると、床の間の軍刀をつかんで玄関へとび出して叫んだ。

『どうせ戦争に負けたんだから、いまこで死んでやる。おれのしたことに文句がある奴は、殺して道づれにするから前へ出ろ!』

私は気がいのように逆上し、軍刀を抜いて彼らに近づいた。彼らはわめきながら逃げ散った。私はこれまでにしてきたことも、これからしなければならいこともわからなくなつて、真夏の太陽の下でむなしく軍刀をふりまわしていた」山口県労務報国会下関支部の元動員部長・吉田清治としての活動の始まりだった。

た。

抜粋部分だけでも手慣れた文章である。最後の一文など非常にドラマチックで、話を盛り上げて書く手法を持っていることがわかる。

長男はこの投稿について少しか父から話を聞いていた。

「労務報国会で雇っていた朝鮮人の大半は共産党員だったそうです。終戦の八月一日か翌日、家に集まってきた彼らに軍刀を振り回したというのは嘘だと言っていました。当時、軍人でもない父に、軍刀は支給されていなかったのです」

それなら話自体の信憑性も疑われるが、この内容を事実としてすぐに著作に取り込んだ人物がいた。朝鮮大学校で教鞭を

執る歴史研究家の朴慶植氏である。強制連行文献のバイブルとされる彼の『朝鮮人強制連行の記録』に引用されるのだ。

ただこの時点では、記事は労務報国会の仕事の範疇での体験であり、「慰安婦狩り」をしていたとも、済州島に行ったとも書いていない。

次に彼が労務報国会元動員部長として書くのは、昭和五二年。最初の著作『朝鮮人慰安婦と日本人』である。一四年後のことである。

この間の吉田氏の足取りはこれまでいっさいわかっていなかった。

長男次男のソ連留学

八億ドルの援助資金と引き換えに韓国

が請求権を放棄した日韓基本条約。それが結ばれた昭和四〇年前後の数年間、吉田清治氏は、一家で小野田セメントの子会社「小野田化学工業」の寮の住み込み管理人をしていた。

「ここから門司高校に通いました」と長男は振り返る。

当時、生活に大きな変化があったのは、その長男と次男だった。相次いでソ連に留学しているのである。

当時はまだ留学はおろか、海外に行くことさえ非常に難しかった。このため、一部では、二人の息子のソ連留学に関し、清治氏はソ連のスパイではないのか、コミンテルンに関係しているのではないかなどと囁かれてきた。

マンガ熱

斎藤宣彦



マンガの面白さとは何か。ちばてつや、大友克洋、藤田和日郎、田中相模……ベテランから気鋭までが熱気あふれるマンガの(現場)を語りつくしたインタビュー集。

●本体1800円＋税

筑摩書房

サービスセンター 電話048(651)0053
http://www.chikumashobo.co.jp/

「ソ連留学は私たち兄弟の意志で、父とはまったく関係ありません。貧しかったので、普通に大学へは行けなかった。高校を卒業したら働くか、ただで行ける大学に進むしか選択肢がありませんでした。東京にいたなら防衛大学校も考えられる。でも住んでいるのは下関です。それでいろいろ探したんですが、フルブライト留学生は旅費は自分持ちだった。一方、ソ連留学は総評（日本労働組合総評議会）が橋渡しをしていて旅費も生活費も全部無料。それで試験を受けてみたら受かった」

ただし、まったく父・清治氏の関わりがないわけではなかった。

「試験に受かったから行けるわけではないんです。誰かの推薦が必要だった。私たちがいた小野田セメントの労働組合は合化労連（合成化学産業労働組合連合会）と言って、後の総評議長となる太田薫氏が委員長だった。彼が下関に来た際に、父が推薦をもらえるよう頼みこんだ。それで推薦が決まったんです」

当時、ソ連は社会主義を学ばせるため、

周辺国から積極的に留学生を受け入れていた。多くの留学生は、モスクワ大学で一年間語学研修をした後、各地の専門分野に秀でた大学に転入した。

長男は昭和四四年ごろモスクワ大学に留学、その後ウクライナのキエフにあるハリコフ大学物理学科に進学した。次男も一年遅れでモスクワ大学を経て、ハリコフ工科大学に留学した。

しかし吉田兄弟はともにソ連の大学を卒業できなかった。

「父が合化労連に頼んで推薦状をもらったことが会社につながってしまった。解雇された。両親の仕事がなくなったわけですから、戻ってきて働かなくてはならなくなりました。だから留学していたのは三年半ほどです」

やむなく帰国した兄弟は北九州市八幡西区にある自動車整備工場に板金工として就職した。帰国当日に求人雑誌を購入し、会社に電話してその場で決めたという。翌日から工場に通った。会社が用意してくれた職場近くのアパートに居を定めた兄弟は、そこに両親を呼び寄せる。

以来、一家の家計を支えるのは、留学帰りの兄弟となった。

「父は健康がすぐれないこともあり、全然仕事をしていなかったですね。あんまり給料がよくなかったもので、私は土曜日曜は別にガードマンのアルバイトをしていました」

その後、一家が上京するのは、昭和四八年のことである。

兄弟はその前年に「ソ連留学記」を出版していた。自費出版ではない。長男次男の名前が出ているため書名は秘す。

当時、ソ連留学は珍しかった。このため留学中から帰国のたびに編集者が来て話を聞いて行ったのだという。

「自分で書いたというよりは、出版社の人が来て、何度もインタビューしてまとめたものなんです」

と長男は振り返る。その内容は、留学中の日々の暮らしや学生、特に女子大生との交流などを軽いつつ綴ったものだ。

どうもこうした関係で知り合った人物の勧めで上京したらしいが、一家は神奈

川県横浜市鶴見区に引っ越し、長男は川崎にあった東芝のトランジスタ工場に勤めることになった。

そこで一家はそれぞれ大きな転機を迎えることになるのだ。

公安警察と吉田家

まず長男について。

さらりと驚くべき話が披露された。その話を聞いた時、何度も聞き返さずにはいられなかった。

「公安警察の方から、日ソ合併の船会社で働かないかという話があったんです。

そこでロシア語ができる人を探している

ので、入社して彼らを監視してほしい。

横浜港に入るソ連船の船舶業務を全部取

り仕切っている会社ですから、重要書類が山ほどあるわけです。それを随時コピーして渡すだけでなく、公にできない活動もしていました。弟も別の会社に就職させるということでした」

ソ連に留学し語学が堪能ということで、兄弟とも公安警察からリクルートされたというのである。昭和五年のことだ。

にわかには信じがたい話だが、当時、彼を勧誘した神奈川県警の刑事にもインタビューすることができた。仮に堂上明氏とするが、七八歳の彼の記憶は鮮明だった。

「東芝のパーツ工場にソ連の大学を卒業した人物がいるという情報が入ってきて、会いに行きました。当時、水上警察署の

ほうから船会社でロシア語ができる人間を求めているという話があった。これはすぐに就職させられると、兄は東洋共同海運に、弟は別の運輸会社の横浜支店に就職させました」

堂上氏は、昭和三十七年に警察学校に入學し、翌年から神奈川県警の戸部署、横浜水上署、本部外事課、鶴見署などに勤務し、公安警察の最前線で諜報活動を行ってきた人物である。途中、ロシア語の教育も受けている。

彼は吉田家と非常に親密な関係を築き、一家ぐるみの付き合いに発展する。清治氏の妻フサエさんは昭和五四年に死去するが、その葬儀を取り仕切り、翌年の次男の結婚式にも親族として出席している。

「日・米・台」で築け、
アジアの平和!

李登輝

哲人政治家・元台湾總統が叱咤激励! リーダー不在、
Gゼロ(米)国支配終焉! 時代のニッポンの進むべき道。

熱誠憂国 日本人へ
伝えたいこと



定価・本体1100円(税別)

978-4-620-32369-5

毎日新聞出版

〒102-0074 東京都千代田区九段南1-6-17
http://mainichbooks.com/

「電話応対の仕方とか、待ち合わせ場所の選び方とかいろいろ厳しい教育を受けました。誰かの手帳を翻訳したり、ロシアの軍艦が入港した時には乗員名簿をコピーしたり。やっぱりお国のためですし、言われた通り頑張りました」

長男が公安のために働くようになった翌年の昭和五二年、父の清治氏はデビュー作『朝鮮人慰安婦と日本人』を出版する。版元の新人物往来社で担当したのは、後に草風館という出版社をおこすことになる内川千裕氏である。在日朝鮮人やアイヌ関係の書物を数多く出版してきた人物だが、平成二〇年、鬼籍に入っている。したがって出版の経緯を彼の口から聞くことができないが、週刊朝日の投稿以来、長らく沈黙してきた清治氏がここで出版したのは、何らかのきっかけや理由があったはずである。

「もともとは自分の自叙伝を書くつもりくらいだったんじゃないでしょうか」と語るのは長男である。

「私が本を出したのを見て、それも口述で本を出せたわけですから、私より文章

のうまい父は、出版社何社かを訪ねていけば簡単に出生してもらえらるって思っていたんじゃないでしょうか」

ただ、と長男は続ける。「経験していいことは書けるはずがない。一冊、空想で書くことは不可能でしょう。だから誰か手助けした人がいる。でも私はその頃、過労死寸前くらいに働いてましたから、ずっと家にいた父とはほとんどかかわっていません」

同書にある朝鮮半島に出張しての男性労務者の強制徴用や下関での慰安婦調達の内容に関して、当時、さして反響があったようには思われない。そのせいなのか、昭和五五年、清治氏は朝日新聞川崎支局に売り込みの電話をかけている。それを受けた前川恵司氏が『朝日新聞元ソウル特派員が見た「慰安婦虚報」の真実』の中でこう書いている。

「朝鮮人の徴用について自分はいろいろと知っているの、話を聞いて欲しい」と電話してきたのが、吉田氏だった。

横浜市内の彼のアパートを訪ね、話を

3、4時間は聞いた。

(中略) 当時の記憶は薄らいでいるが、それでも、彼の話には辻褄が合わないところもあった」

そう書きつつも、この前川氏は三月七日の紙面で「連載 韓国・朝鮮人2 (27) 命令忠実に実行 抵抗すれば木剣」と題する記事を書き掲載した。これは取消記事のもっとも古いものとなる。

わざわざ電話をしているのは、応募やモニター好きの性向が頭をもたげてきたからなのか、それともこの問題を広めねばならないさし迫った理由があったのか。どちらにしても清治氏は積極的に動き出したのだ。

土下座事件

この時代の清治氏について、驚くべき証言をする人がいる。先の神奈川県警刑事の堂上氏だ。

「お父さん(清治氏)とは、奥さんの葬式にしても次男の結婚式にしても、すぐその場からいなくなってしまうって、ちゃんと話をしたことがなかった。それが突

然、鶴見署へ私を訪ねてきた。昭和五五年の梅雨時のことです。玄関で土下座して私を呼んでいると連絡があったので行ってみると、清治氏がいて奇妙な話をし始めた」

それはこんな内容だったという。

「息子がお世話になってます。実はある人から、「お前の息子たち兄弟は敵国であるソ連のために働いていて、けしからん。こういう状況ではこれまで進めたこと、これから進めることにあんたは参加できなくなる。即刻、兄弟をソ連のために働いている会社から退職させなさい。あとの就職についてはこちらで面倒を見る」と言われました」

それで息子たちに内緒でそれぞれの会

社を訪ね、退職させてきました。でもこのまいうちに帰れば、息子たちに殺されてしまいかねない。どうか息子たちとの間に入って、彼らを納得させてほしい」堂上氏は語る。

「私としては、苦勞して二人を会社に入れているわけだから、それを勝手に退職させて、間に入ってくれなんて馬鹿な話はない。そもそも就職させたときに挨拶ひとつなかった。いったい何なんだろうと思いましたね」

それで堂上氏は難詰した。

「清治さんの勝手な行動で、かつて息子さんは大学を辞めて戻ってこなければならなくなった。それなのに今日も土下座までして、会社を辞めさせてきたという。

タフな教室のタフな練習活動

英語授業が思考のふり巾を広げるには

【著】泉康夫 授業規律が著しく崩れたタフな教室にあつて、分かった瞬間を積み上げることでできる生徒と、その瞬間だけで終わってしまう生徒の力を共に伸ばそうとするとき、ハードルを下げ、間口を広くした補習習は優れて有効性が高く、とりわけ基礎を固めるには最適 教育困難校で効果的だった補習習の実践集

1800円＋税

在と不在のパラドックス

日欧の現代演劇論

【著】平田栄一朗 逡巡する胆力を鍛える、観劇という遊戯的経験のダイナミズム。演劇理論におけるプレゼンス論とアブセンス論を踏まえながら、観客が舞台作品を見る際に衝動や葛藤に駆られる内面的動的なプロセスの多様性を、上演分析によってあざやかに解き明かす。

3000円＋税

三元社

〒113-0033 文京区本郷 1-28-36

風明ビル1階

電話 03-5803-4155

www.sangensha.co.jp

いることを把握していなかった。諜報機関とすればお粗末な話であるが、堂上氏はK C I Aと確信した。

まだ金大中事件が記憶から薄れていない時期だった。昭和四十八年八月八日、民主活動家だった金大中は、白昼、東京都千代田区のホテルグランドパレスから拉致され、密かに日本から連れ出された。そして監禁を経て、事件から五日後にソウル市内の自宅前で発見された。これを実行したのが、K C I Aだった。

それにしても、なぜ清治氏はその組織と動いているのか。その組織の言いなりになっているのか。当然、堂上氏がそこへ切り込むと、こう答えたという。

「若干、お金を借りています。これは息子たちに言っていない。わたしがちよっと困った様子を見せたら、これを使いなさいと渡されました。三〇万円くらいです。私がいまやっていることについて、その人たちはいろいろ教示してくれま

す」

その後、堂上氏は、川崎のステーションビル最上階の食堂に清治氏を誘い、さ

らにいろいろ尋ねている。だがK C I Aとは最後まで言わなかった。そして「車賃もなさそうだったので」五〇〇円くらいを渡して別れたという。

公安警察はこうした事実を知りながら、吉田清治氏の背後関係を調査した形跡がない。それはなぜなのか、

「私はこの話を上司にはしていません。この話をすれば息子たちが知り、ソ連からの情報収集に支障をきたすからです」だからこの一件は吉田兄弟も知らないのだという。

長男に確認すると、困惑気味にこう話す。

「おそらくそれは父の作り話です。子どもでもあるまいし、親が勝手に本人の許可もなく会社を辞めさせることはできません。私は自分の意志で川崎から新橋の翻訳会社社に転職しました。給料がよかったです。父は私たち兄弟をダシにして何かの理由で堂上さんに接触を図ったのではないのでしょうか」

ここでもう一つ、知られざる事実に触れておかねばならない。

昭和一二年に吉田清治氏が養子とした四歳下の韓国人・李禎郁氏のことである。すでに彼は昭和一七年に日本人と結婚し、日本と中国で二人の子供をもうけたことまでは記した。では、その後、彼はようになったか。

戦後は日本に戻り、福岡市でさらに二男をもうけている。

そしてその頃、彼は福岡市板付の米軍基地（福岡空港）で、全駐留軍労働組合の活動家になっていた。長男は、

「一度も会ったことがない。全駐留にいたことは聞いたことがあります。上京した父と付き合ひがあったかはわからない」と言うが、先の堂上氏はこんな証言をする。

「あの日、あなたはなぜ韓国に興味を持っているかを聞いたんです。そうしたら、私はいいいこともするんですよ、全駐労働者知ってますか。全駐労働者とも私、お話しします。全駐労働の初代委員長、韓国人なんですよ。でもそれじゃ困るからと私の籍にいれさせたんですよ、そ

ういう話を聞きました」

堂上氏はその名前まで覚えていないが、これは李禎郁のことを指しているとしたか考えられない。もともとあった事実の話に加えて虚実緋い交ぜにするのは吉田氏の特技だが、このやりとりからすると昭和五五年頃、禎郁氏と連絡を取り合っていた可能性が高い。さらに兄弟の留学にも関与している旨述べたという。

労働問題を扱っているという点では、ずっと吉田清治氏と関係があってもおかしくない。あるいは、元朝鮮人という点が重要だったのか。

この禎郁氏は昭和五八年、福岡市南区で死去した。禎郁氏の長男にも取材してみたが、養子入りの事情など「何も存じあげません」とのことだった。

慰安婦問題の「語り部」誕生

その昭和五八年、吉田清治氏の第二作目『私の戦争犯罪』が、三一書房から出版された。奥付には七月三十一日発行とある。済州島で慰安婦狩りをしたことが詳細に書かれている本だ。例えばこんな調

子である。

「隊員に肩をつかまれた若い娘が、悲鳴をあげて隊員の手を振り払った。年取った女が、娘を抱きしめて叫び立てた。隊員は年取った女を突きとばし、娘の顔を、音を立てて平手打ちした。女たちの群れが、かんだかい声でわめきたてると、隊員たちが怒号して襲いかかった。隊員に反抗してはげしくもみあい、服が裂け、胸もとが裸になった娘が泣き叫んで、塩かますにしがみつくと、隊員に腰を蹴られて床に転がった。この島の娘は、足は素肌で、ばたつかせて暴れたが、隊員は足くびをつかんで、笑いながら引きずり出した」

労務報国会下関支部動員部長の吉田清治氏が済州島の「塩乾魚の製造工場」へ慰安婦狩りに行ったときの様子である。同書の編集を担当したのは同社の編集者で、現在は労組交流センターを組織する三角忠氏だ。担当者としていまも清治氏の証言を支持している。

「初めて会ったのは前の本が出るちょっと前のことで、日本の戦争責任資料セン

ターの上杉聰氏の紹介で、大阪の講演会で会いました。吉田さんは何人かいる報告者の一人だったように記憶しています」

すでにそこで慰安婦の強制連行について話していたという。

原稿を頼んだのは、第一作が出てからだった。

「まだ十分に語り尽くしていないんじゃないかという気持ちがあって、もう少し加害者として、普通ならば自分の口から言いにくいことまで含めて全部赤裸々に書けないものかと考えていたんです」

当初吉田さんは慰安婦狩りについて「そこまで書きたくない」と言っていました。それでも彼が勇気を持って告白したのは、彼女たちが儒教文化の中でその経験を生涯口に出せず、墓場まで持っていくしかなかったからです。吉田さんはその体験をわが身を削って記した

済州島については「私の方からヒントを出した」という。

「私がもともと済州島に非常に興味があ



平成4年8月、元慰安婦の金学順さんに謝罪する吉田清治氏。(時事通信社)

ったんですね。金石範の『火山島』を読
んでましたから。濟州島蜂起の話をした
ら、「あつ、そう言えば」という感じで
したね」

濟州島での慰安婦狩りはこうしたきつ
かけで書き始められたのだ。

同書の序文には、清治氏の週刊朝日の
投稿文を自著に引用した朴慶植氏が一文
を寄せている。

「これは僕が依頼しました。ただ吉田さ
んと朴さんは本が出る前から知り合いとい
うか、古くからお話をされていた関係

だったと思います」

『私の戦争犯罪』が出る前年、清治氏は
講演会で慰安婦狩りを語り、それが「朝
鮮の女性 私も連行暴行加え無理やり」
という朝日新聞の記事(昭和五十七年九月
二日、取消記事)になっている。さらに
九月と十一月には、サハリン残留韓国・
朝鮮人帰還訴訟、いわゆる樺太訴訟で二
度にわたって法廷に立ち、一度目は樺太
への男子の朝鮮人狩りを、二度目は濟州
島での慰安婦狩りを証言している。

ちょうど執筆と重なる時期、次々に慰
安婦問題を語り始めていたのだ。

その頃、長男は東洋共同海運を辞めて、
新橋にある翻訳会社勤めていた。住民
票も東京に移し、父とともに東京都文京
区に越してきた。

その長男が衝撃的な証言をする。

「父は濟州島には行っていません。それ
は父から聞いています。それで父は、濟
州島の地図を見ながら、原稿用紙へ原稿
を書いていました」

ではなぜあれほど克明に書けたのか。

「材料はなかったはずです。ですからそ

れは、出版社や周りにいた人たちに発言
をしていただきたいんです」

出版直前に、清治氏と長男は、品川区
上大崎に再度引っ越した。

「父が勝手に不動産屋に行つて決めてき
ました。それまでは家賃四万円くらいだ
ったのが、二万円くらいになった。さ
すがに無茶だと思ったんですが、父は五
〇〇万、一〇〇〇万はすぐに入るから心
配しなくていい、家賃どころか過去のお
前に掛けた苦勞は全部返すから、と言っ
ていた。でもそれがのちに家計的にすご
く負担になってしまいました」

先の三角氏によれば、同書は三刷まで
して合計で約八〇〇〇部ほど発行された
という。印税は一〇〇万円ちょっとであ
ろう。清治氏に何かあてがあったのだら
うか。

昭和五十八年十二月、清治氏は韓国忠清
南道天安市を訪問、私費で建てたとされ
る謝罪碑の前で土下座した。その「望郷
の丘」の碑にはこう刻まれている。

「あなたは日本の侵略戦争のために徴用
され強制連行されて 強制労働の屈辱と

苦難の中で 家族を想い 望郷の念も空
しく 貴い命を奪われました

私は徴用と強制連行を実行指揮した日
本人の一人として人道に反したその行為
と精神を深く反省して 謹んで あなた
に謝罪いたします

老齢の私は死後も あなたの霊の前に
拝跪して あなたの許しを請い續けます
合掌

1983年12月15日

元労務報國會徴用隊長 吉田清治

それは例えば「たった一人の謝罪(写
真付)」(朝日新聞二月二十四日、取消記
事)のように、新聞テレビなど各メデ
ィアで大々的に取り上げられた。

だがこれについても、長男は、
「石碑を建てたり、韓国に行ったりする
お金は、うちにはありませんでした。あ
れはいろいろな人からの支援だと思いま
す」

と言う。そしてこんな話を打ち明ける
のだ。

「韓国から戻ってきた後、父のパスポー
トを見てびっくりした記憶があります。

日本からの出国と帰国のスタンプはある
のですが、韓国への入国、出国のスタン
プが押されていない。なぜかと聞いたら、
韓国の空港につくやいなや韓国政府の人
がやってきて特別室に案内され、そのま
まソウルの街に出たんだそうです」

さらにこうも語る。
「いずれは長男も韓国に来てもらって
韓国を好きになつてもらわなきゃ困りま
すと偉い人から言われたそうです。立派
なことをやっているんだと、そう私に自
慢したのを覚えています」

一方、謝罪の旅をテレビで見ていた、
先の神奈川県警刑事・堂上氏はこんな感
慨を抱いた。

「正直なところ、可哀そうだなと思いま
した。本当のおやじさんの顔じゃなかつ
た。痩せちゃっているし、怯えている姿
そのものでしたよ。自業自得だな、しょ
うがないなとは思いましたが、最後には
可哀そうになつてきた。このあとKCIA
に殺されなきゃいいな、とも思いまし
た」

一方、訪韓謝罪パフォーマンスは、当

然ながら日本の右翼を激怒させた。長男
が言う。

「訪韓後しばらくして、父は笹川良一氏
に呼び出され、顔面蒼白になつて帰宅し
たことがありました。尋常でない様子に
声を掛けると、韓国に強制連行の碑を建
てて謝罪して回っているそうだが、今後
こういうことをしたら命はないものと思
えと脅された」と語ったのです」

寂しき晩年

時期的に考えて、吉田清治氏がそれに
屈したようには思えない。「慰安婦狩り」
の語り部としての活動は、平成三、四年
年くらいまで続く。朝日新聞の取消記事
は、平成三年と四年で六本もある。

「女たちの太平洋戦争 従軍慰安婦 木
剣ふるい無理やり動員」(平成三年五月
二二日)

「女たちの太平洋戦争 従軍慰安婦 乳
飲み子から母引き裂いた」(平成三年一
〇月一〇日)

「窓 論説委員室から 従軍慰安婦」
(平成四年一月三日)

「窓 論説委員室から 歴史のために」
(平成四年三月三日)

「今こそ 自ら謝りたい 連行の証言者、
7月訪韓」(平成四年五月二四日)

「元慰安婦に謝罪 ソウルで吉田さん」
(平成四年八月二三日)

一方で、取消記事のピークの平成四年には次々とその証言の信憑性を疑う報道が始まる。前述の通り四月には、その証言に疑問を感じた秦郁彦氏が済州島で調査を行い、吉田氏の体験のような事実が出てこないことを産経新聞で発表した。週刊誌などでもその発言を疑う記事が始める。

平成五年に河野談話、七年には村山談話が発表され、民間での賠償を行うアジア女性基金の枠組みができると、慰安婦問題の盛り上がりとは逆に、メディアは吉田清治氏の証言を取り上げることにためらいを見せるようになった。

舞台は韓国に移っていた。すでに慰安婦であると実名で名乗り出て日本政府に謝罪と補償を求める女性が、メディアの中心にいた。

も付き合っていないかったのだ。

三角氏が当時を振り返る。

「亡くなる一か月ほど前に一時間ほど電話で話しました。当時、家永三郎さんから電話があって、『私の戦争犯罪』という本が偽書だと言われているようだが、私はそうじゃないと思う。非常に優れた本だ。他の人がいっさい口をつぐんでいる加害の事実をよくどこまで書いたと、そんなことをおっしゃられて、ぜひ吉田さんに会いたいと言われたんですね。そこで吉田さんに電話した。

そうしたら吉田さんは、あの本の内容はまったく真実です、人から聞いて書いたこともデタラメを書いたわけではない、と話して、いま自分は気力が本当に失せてしまってお話できるのは電話くらいで、家永先生とお会いしてお話できるような状態ではないと。もう体力的にも衰弱している状態だったんです」

三角氏はいまも本の内容を事実であると考えている。

「僕は済州島にも行ったと確信しています。他から聞いて主語を自分にして

そして平成八年に冒頭で書いたクマラスワミ報告書が提出され、平成二〇年に旧ユーゴスラビア戦時下の女性暴力問題に付属して慰安婦問題で日本の責任を追及するマクドゥーガル報告書が出される頃には、吉田清治という人物自体の信用性は限りなく失墜していた。

朝日新聞もすでに平成九年三月三十一日の特集記事で、吉田証言の「真偽は確認できない」としている。

担当編集者の三角忠氏が語る。

「吉田さんが一番こたえたのは、慰安婦問題に取り組んできた中央大学の吉見義明さんと関東学院大学の林博史さんなどが学術的な資料としてはちょっと使えないと言いつ出したことなんです。お二方には、そういう言い方をするとこの本の歴史的証言を貶めることになるんじゃないですかと言ったんですがね。唯一、西野瑠美子さんだけがいまもこの本を事実だと言ってくれている」

そう言う三角氏も一〇年近く会っていないかったというから、晩年の清治氏は失意のなか、寂しい老後だったのではある

部分にしても、あつてしかるべきだと。

歴史的事実としてそれはあるわけですから。それにやっぱり亡くなる前、死期が近づいている中で言ったことは重いですよ。今から思うと、それまでくぐもった言い方だったのがあの時はとても潔かった」

だが、長男はまったく正反対の思いでいる。

「父は結果として大変誤った歴史を作り出してしまった。これは私が生きているうちに直さなきゃいけないと思っています。軍が民間団体に軍の命令書を発行するわけがありません。労務報国会という半官半民の組織や民間組織が軍命で朝鮮人女性をトラックに載せて集めるなんてことができないわけがない。これは歴史的事実として、長男の立場から真実を定着させていかなければならない。父が暴走し始めた時に私がストップパー役になっていればと、悔やんでも悔やみきれません」

そして朝日新聞についてはこう語る。

「二年前、慰安婦報道について訂正記事

まいか。

そんな清治氏の生活を支えたのも長男だった。清治氏と長男は昭和六一年から千葉県の我孫子市に居を移していた。長男の勤める翻訳会社の子会社がそこにできたためだ。

「二〇年くらいそこで働いて、フリーになりました。朝から晩まで、ときには職場へ寝袋を持ちこんで、仕事ばかりしていました。忙しい日々でした。とにかく生活費を稼がなきゃいけなかった。当時は統合失調症の弟の面倒も見なくてはなりませんでした。離婚して私たちと同居するようになっていたんです」

そして平成二二年七月三〇日、以前から直腸癌を患っていた清治氏は、結核性の肺炎を起こして死去した。享年八六。「亡くなる五年くらい前から寝たきりで、一人で用を足すこともままならず、おむつをあてがっていました。何度も入院を勧めたのですが、医者と学者は嫌いだとかたくなに拒否して家から離れませんでした」

新聞に訃報は載らなかった。もはや誰

を出す二、三日前に、私を訪ねてきました。取材というよりは最初から筋書き通りの形式的な質問をして三〇分ほどで引き揚げていきました。平成九年の段階でなぜ父に直接取材をしに来なかったのか。その時に真相を究明していれば少しでも慰安婦報道の歪みが正されていたのではと思います」

二年前に弟が死去した。長男は生涯独身だが、父と弟の世話から解放され、いま人生で初めて二四時間を自分一人だけのために使える生活が訪れたという。私の目にも長男は静謐な日々を送っているように見えた。

八月四日、こんな新聞記事が掲載された。

「ソウルの日本大使館前にある慰安婦を象徴する少女像と同種の像の除幕行事が、8月中旬にオーストラリアの最大都市シドニー郊外を含め10カ所で行われ、年内には像の建立地が韓国内外で50カ所を超え見通しとなった」(産経新聞)

始終穏やかに語った長男の胸中に、真の平穏が訪れる日は遠い。